

沖縄高麗系瓦考

——新型式文字瓦の打捺文復元と判読を中心に——

高 正 龍

はじめに

沖縄の瓦は、高麗系瓦、大和系瓦、明系瓦の三つの系統に分かれる¹⁾。このうち、高麗系瓦には「癸酉年高麗瓦匠造」という文字瓦があり、高麗と琉球との関係をダイレクトに物語る資料として注目を集めてきた。文字瓦は平瓦・丸瓦の凸面に施された打捺（叩き）によるもので、このほかに「大天」「天」などの文字があり、いずれも羽状文²⁾という高麗時代瓦によく見られる文様をともなう。

1996～2004年度の浦添ようどれの調査において新たな文字瓦が報告された〔宮里・木下2005〕。これは打捺が重複し、文字が明瞭でないこともあり、いまだ判読に至っていない。筆者は2023年2月にこの新たに設定された打捺文型式について詳細に観察できる機会を得た。その結果、これは新たな干支銘であり、高麗系瓦を考える上で重要な資料となると認識するに至った。

ついで、これに関連して、あらためて「天・大天」瓦の集成をおこなった。これまで知られていた韓国の事例のほかに、中国（高句麗）や日本の事例を見いだすことができた。

また加えて、沖縄独自と言われてきたいわゆる長方形軒平瓦について、形態を同じくする播磨産の瓦当の存在に気がついた。これらを紹介するとともに、沖縄長方形軒平瓦の型式・機能について検討をおこないたい。

1. 新型式文字瓦の打捺文復元と判読

(1) 新型式の発見

高麗系瓦の分類は、大川清以来、軒丸瓦・軒平瓦が范型による分類、丸瓦・平瓦は凸面の打捺文による分類〔大川1962〕が行われてきた。その中で文字を伴う打捺文は4種ある。さきに述べた「癸酉年高麗瓦匠造」と「大天」「天」「瓦(?)」の3種で、これらはさらに文様の特徴から細分が行われてきた。

浦添ようどれの調査において、新たな型式の文字瓦が出土した。2005年に刊行された浦添ようどれ報告書Ⅱでは「「天」に判読不明文字が重なる」〔宮里・木下2005, 22頁〕として「天」瓦の中に新型式として置かれ、新たな型式分類表(表1)が示された。ついで、同報告書Ⅲでも新型式の文字瓦の事例が追加され、「重ね文字は縦に三文字確認される。中央は「年」の鏡文字のように見えるが判然としない」〔宮里・木下2007, 38頁〕と、一部判読が試みられたが、その後はこれについて特に言及されたものはない。

これまでこの型式として報告されているのは、報告書Ⅱの2点と報告書Ⅲの1点、合わせて3点である(図1)。少数の型式にも見えるが、これまで出土している天瓦の多くが打捺板の天銘側を残

す形で打捺板を半分ずらしながら打捺されているため(図2)、その中にはこの新型式が含まれる可能性を残しており、細分が難しい状況にある。

表1 浦添ようどれ出土高麗系瓦(平瓦)

高麗系平瓦									分類
その他	打捺文5類「天」		打捺文4類「大天+月?」	打捺文3類「大天」		打捺文2類「格子文+瓦?」	打捺文1類「关(矣)酉年高麗瓦匠造」	a	
	2「天」に不明文字が重なる	1「天」のみ		b	a				
									模式図
左右二つの枠があるが空白となるもよう。枠は他比べて小さく縦二・三cm×横二・八cmで、正方形に近い。叩き板の幅は不明。	四つの枠のうち右上に「天」をおき、さらにその上に他の文字が重なる。重ねた文字は縦に三文字確認されるが詳細は不明。文字枠の大きさは右の5類1と同じと見られる。「天」の文字は正位。新設種。	銘の配置や文字枠の大きさ等は右5類1aと同じだが、羽状文の端部に横位線が無い点で異なる。新設種。	四つの枠のうち、右上の枠に「天」をおき、他の枠は空白。枠は正方形に近く、縦約四・〇cm、横は右枠が約三・六cm、左枠の幅は不明。文字は正位。叩き板の幅は不明。羽状文の端部に横位線が1本ある。	左枠に「大天」、右枠に「月?」。枠は縦長で、縦約六・二cm、横は右枠が約二・九cm、左枠は不明。文字は正位。	銘の配置や文字枠の大きさ、叩き板の幅等は右の3類aと同じだが、羽状文の端部に横位線が無い点で異なる。	左枠に「大天」、右枠は空白。枠は縦長で、縦約六・二cm、横は右枠が約二・八cm、左枠が約三・一cm。叩き板の幅六・四cm前後とみられる。文字は正位。羽状文の端部に横位二本線がある。新設種。	右枠に「格子文」、左枠に「瓦?」がある。格子文は縦四本、横三本の線で構成。「瓦?」は鏡文字か?。天地逆?。枠は縦が約二・八cm、横は右枠が約三・六cm、左枠は約三・八cm。やや縦長。叩き板の幅は七・六cm前後とみられ、他よりも幅広い。	右枠に「癸酉年高」、左枠に「麗瓦匠造」がある。銘は鏡文字で天地も逆。枠は縦長で、縦が約六cm、横は左枠が約三・四cm、右枠が約二・九cm。叩き板の幅は六・七cm前後とみられる。	打捺文等の特徴

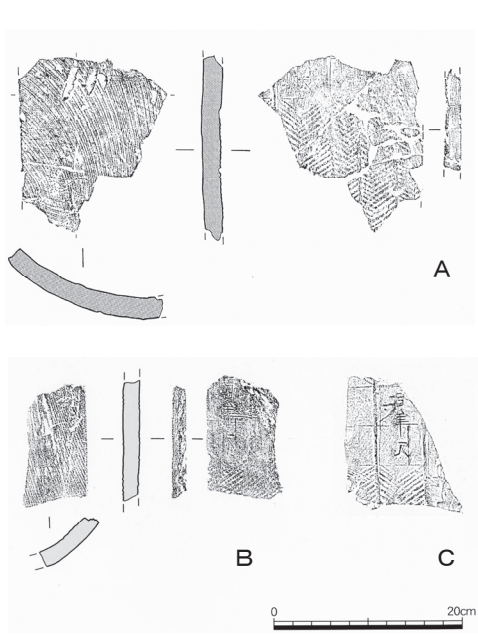


図1 浦添ようどれ「天」+不明文字型式 (s: 1/8)

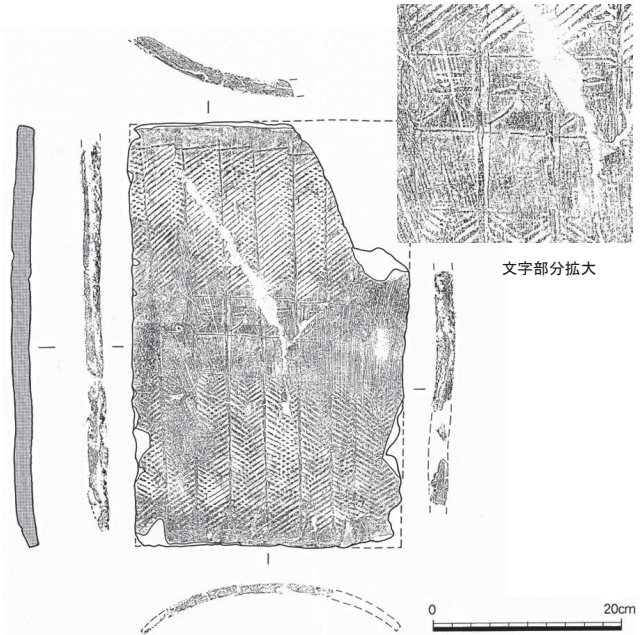


図2 浦添ようどれ「天」平瓦 (s: 1/8, 文字拡大部分 1/4)

(2) 打捺文の復元

報告書ではこの新型式は拓本がそのまま掲示されており、まずは打捺文の復元を行いたい。

打捺文5類(表1)は3種に分けられているが、いずれも羽状文の中心線が太線と細線が二重になっている部分が共通しており、同じ打捺板だが、追刻や劣化などで文様が異なる「同板異文」である。中央に方形の区画が四つあり、その上下に羽状文を配置する。

このような羽状文をともない方形区画を四つもつ事例として、もっとも近似するのは韓国全羅北道益山市にある7世紀に創建された弥勒寺跡の文字瓦である〔国立扶餘1996〕。各区画に2字ずつ配置され「延祐／四年／丁巳／弥力」と判読されている。不十分ながら拓本右側に単位文様を切り出しておく(図3)。

延祐四年は1317年に当たる。

図4(1)は個体Cの資料調査時にとった拓本と写真で、左側が平瓦の側端になる。天の右半を

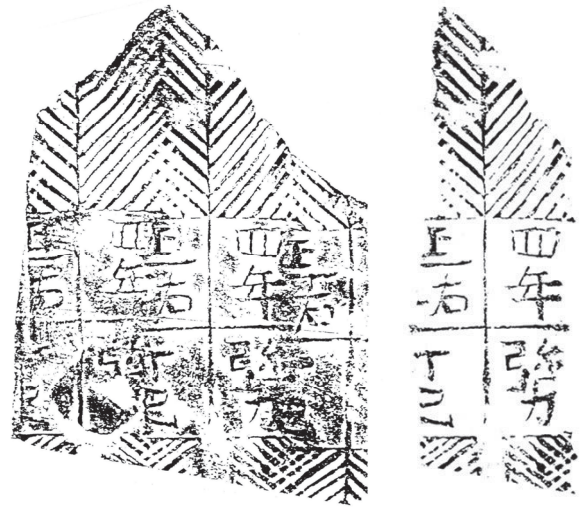


図3 方形区画をもつ瓦 益山 弥勒寺跡文字瓦
(s: 約1/4)

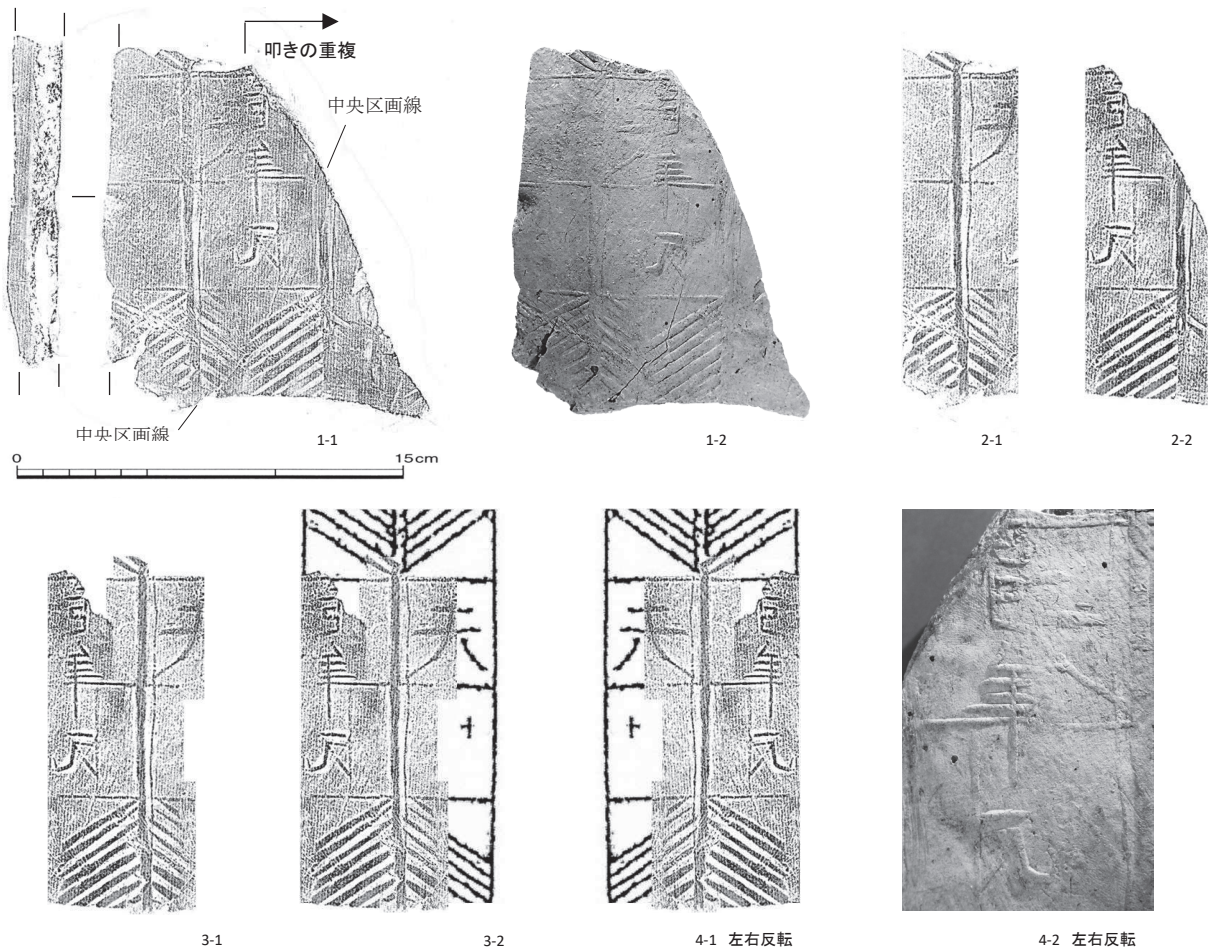


図4 個体Cと「天」+不明文字型式の打捺文の復元

消すように3字ほどの文字が見える。言うまでもなく、これは桶状の造瓦具に粘土を巻き、瓦匠が打捺した際に、打捺（叩き）が重複した結果である。文字の上下が瓦桶の天地を表わすとすれば、瓦面の左から右へ打捺したときに天の右側が打ち消されたと見ることができる³⁾。すなわち、他の天瓦（打捺文5類）と同じく、方形区画の右上に天が入り、その左上と左下の二つの区画に不明文字が入る配置になる。

Cでは文字を左右に分ける太線と細線で構成される中央の区画線が一つの瓦に二つあり、左右の文字が比較的好く残っており、これらを基準に単位文様の復元が可能である。図4(2-1・2)は、この拓本の文字等を強調して左右に切り出したものである。(3-1)は両者の共通する部分を合わせて最大限に打捺文を再構成したもので、(3-2)ではさらに(3-1)に表1の打捺文5類「年」aの拓本を重ねあわせ、単位文様を復元した。(4-1)はこれを左右反転させたもので、打捺板原体に近いものになる。(4-2)写真は文字部分を拡大し同様に左右反転させたものである。

(3) 不明文字の判読

瓦に残された不明文字は鏡文字であるため、文字の検討は主に左右反転した図4(4)を使用する。以下、おもに韓国の文字瓦と比較しながら、1字ずつ文字の判読を進めて行いたい。

1) 「年」(図5)

まず、下から2字目は浦添ようどれ報告書Ⅲで指摘されたように、「年」として問題はない。横画が4本ある年の異体字(図5-1)は珍しくない[国立国語1992]。本例は、一見すると、横画が5本のように見えるが、最後の1本は方形区画を画する横線である。

韓 国		中 国	日 本
年	한서(1446) 반사(1447)	年	年
年	동산(1477) 공간(1478)	丰	丰
年	한서(1446)	丰	丰
年	영정(1450) 동서(1452)	丰	丰
年	한서(1446) 상주(1447)	丰	丰
年	수동(1422) 장안(1423) 동서(1452) 경음(1453)	丰	丰
年	공간(1478)	丰	
年	공간(1478) 동서(1452) 공간(1478)	丰	
		丰	
		丰	
		丰	
		丰	
		丰	
		丰	

1 「年」의 異体字
[『東洋三國의 略體字比較研究』]

圖5 「年」 関連資料

2. 益山 弥勒寺跡、3. 関西大学博物館所蔵品

この「年」に類似する文字瓦には、益山弥勒寺跡から出土した「太平興國五年庚辰六月日／彌勒藪龍泉房瓦草」瓦（図5-2, 980年）[国立扶餘1996]や羽状文をもち高麗時代と推定される関西大学博物館所蔵「丙申年／瓦匠朴」瓦（同-3）[高ほか2014]をあげることができる。

2) 干支（図6・7）

下から2字目が年と確定できるなら、韓国の文字瓦の事例からその上には年号や干支が来る可能性は極めて高い。一見すると「年」の上は「巨」に見えるが、下半を「巳」と捉え、その上の十干と合わせ、干支となるのであろう。個体B（図6）では巳に接して「状」の凸線が見えるが、線の太さが細く、文字の一部ではなく何らかの傷と判断した。

巳と組みあう干支は、「己巳・辛巳・癸巳・乙巳・丁巳」の5種類であるが、個体Cは上部の状態が悪く、個体Bと合わせて検討する。

図6（1）は個体Bの資料調査時にとった拓本と写真で、左側が側端である。（2）はBとCの干支と思われる部分を拡大したものである。両者を比較すると、Bには凸線が明確に見えるが、Cではそれが潰れているのが分かる。凸線cはその残滓であろう。

またBでは、Cには存在しない凸線aが存在する。これは（3）において、「天」と方格線の交差点を白色の十字で示したように、「天」側と不明文字側の重複状況が異なるため、天のすぐ上の方格線が残存したもので、文字とは関係がない。また、凸線bは不明文字側の方格線と見てよい。これらの不要な線を消してBCの残りのよいところを選んで文字部分を抜き出したのが、（4-1）である。

図7は高麗時代とされる文字瓦の干支を抽出したものである。十干のうち、「乙」は横に長い

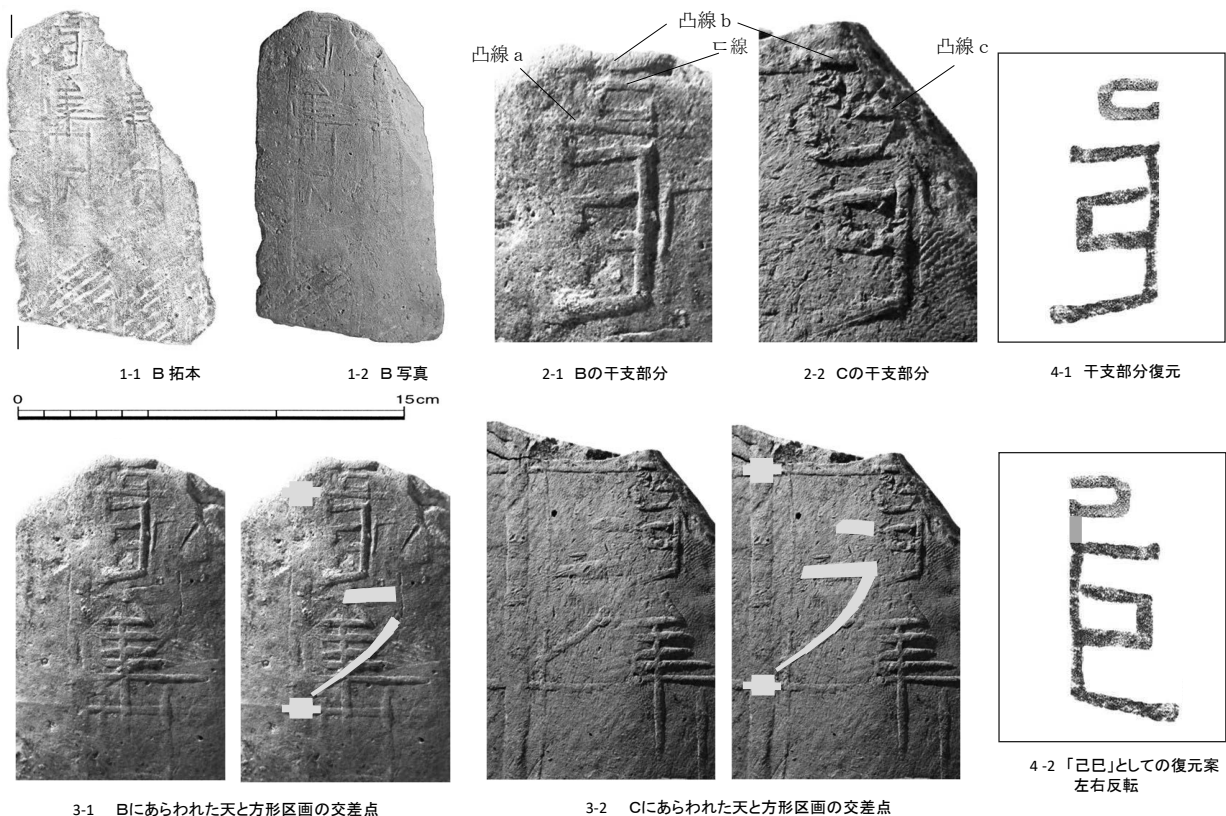


図6 個体BとCの比較と干支部分の復元

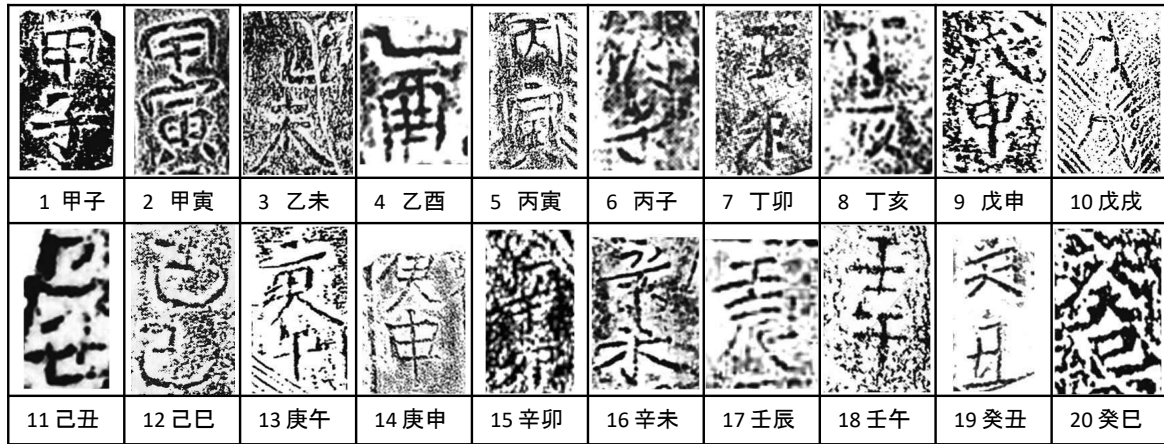


図7 高麗時代文字瓦の干支

1：寧越 興寧禪院，2：泗川 本村里寺跡，3：潭陽 呂内里遺跡，4・6・16：扶餘 無量寺跡，5：昌原 鳳林寺跡，7・12・18：安城 奉業寺跡，8：金海 鳳凰洞遺跡，9・13：益山 弥勒寺跡，10：河南 校山洞建物跡，11：靈光 佛甲寺，14：安城 長陵里寺跡，15：利川 葛山洞遺跡，17：長興 上芳村遺跡，19：釜山 東萊古邑城，20：襄陽 陳田寺跡

わば水鳥状を呈する特徴がある。また、「癸」は沖縄高麗系瓦と同様の異体字「关」があるが、それ以外は現在通用している漢字と変わるところはない。

(4-1) を左右反転させたものに、巳と組みあう己・辛・癸・乙・丁を当てはめていくと、己以外にしっかり収まるものはなく、己字で復元したのが(4-2)である。しかしながら、巳の上が突出して己とつながる点がやや不自然である。また、年がそうであったように、方格線を越えて干支がそれより上から始まるのであれば、ほかの十干が来る可能性は残されている。今後、より状態のよい個体が発見されれば、自然と解決される問題であろう。

3) 「瓦」(図8)

一番下の文字は、漢字としては「元」に近いが、(干支)年+元では意味をなさない。「瓦」の別字として捉えたい。

図8(1)のように、瓦という文字はすでに唐時代には様々な異体字が使用されている。(2)は百濟時代の王都であった扶餘から出土する五部銘の入った刻印瓦である[高2007]。少し解説を加えると、「上卍(部)・前部・中部・下部・後部」というのは五部と呼ばれる王都の行政的な単位で、甲瓦と乙瓦は瓦作りに関する異なる集団をあらわす。これらを印種で容易に区別できるように、印面を甲・乙それぞれを陽刻と陰刻にし、瓦字も(1)の2と5に近い目で異なることが分かる字体を使用している。同時期で同じ性格をもつものであっても異なる字体を使う事例である。

(3～5・8～16)は高麗時代の文字瓦から「瓦」字が入っている拓本を抽出したものである⁴⁾。年代が明らかなものはキャプションに注記した。これらの一部に統一新羅末期に遡る可能性があるものを含む。なお、ここでは文字がつながるように、随意、拓本を合成し、正字として読めるように、左右反転を行っている。

高麗時代に使用された瓦の字体をみると、まず、(8～10)の瓦字は、現在の瓦と比べ1画足りないが、無理なく瓦と読める。(1)4の字体で、「高麗瓦匠造」(7)もこの範疇に含まれる。(8～10)では瓦に続くのは何れも草である。「瓦草」とは、高麗時代文字瓦でよく見られる表現で、こ



図8 「瓦」関連資料

2：扶餘邑各地，3：扶餘 無量寺跡（1045年），4：益山 獅子庵（1322年），5・14・15：新安 黒山島官舎跡，6：沖縄 浦添ようどれ（天新型式），7：沖縄「癸酉年高麗瓦匠造」，8・16：安城 奉業寺跡，9：保寧 千房廢寺，10：康津 月南寺跡（1149or1209年），11：洪城 石城山城，12：河南 南漢山城，13：益山 弥勒寺跡（980年）

のほかにも「官草」「城草」、建物名+「草」などと使われることがある。この「草」については大きく分けて、①始まる、②作る、③瓦を意味するという三つの説があるが〔沈光注2013〕、本論とはずれぬため、今回は詳しく取り上げない。

つぎに（3～5，11・12）は「凡」にノが付く形態である。（3・11・12）は「瓦草」、（4）「造瓦」、（5）「盖瓦」である。盖は「蓋」の異体字で、盖瓦はその後も瓦を示す名称として長く使用される。ノは上に付くもの（3～5）と左肩につく（11・12）ものがあり、（13）のようにノが付かないものもある。これは高麗時代に盛行した字体で、かつては「凡」と誤積されたこともあったが、瓦字である〔車順喆2002，沈光注2013〕。

このほかにも様々な瓦字が存在する。（14・15）はおなじ新安黒山島官舎跡から出土したもので、（15）は「陵城郡公瓦草才八隊」と読まれている。このタイプの瓦は同島の无心寺跡からも出土しており、ほかにも同様な構成で最後に四・五・六（隊）と続くものが確認されている。ここでの瓦字は「フ」と「し」の2画で作られているように見え、この上なく省略された形である。異体字辞典や書体字典にはこれと一致するものはみられないが、全体的としては瓦のフォームを維持しており、瓦として認定してよい。

（16）は、本例（6）にもっとも近いと考える字体である。報告〔京畿道博物館2002〕では「元」と読まれているが、続く文字は「作」であり、元では意味をなさない。瓦と作あるいは造が結びつ

く事例は珍しくなく、(14・15)と比較しても瓦と解して問題はない。

(4) 追刻

以上のように、不明文字を干支+年+瓦の構成であると考えた。干支は十二支が「巳」で、十干が「己」と推定したが、十干にはまだ不確定要素がある。このように見ると「癸酉年高麗瓦匠造」と相通じるところもあり、その簡略化したものと見ることもできるかもしれない。

加えて、「天」字が枠内にきっちり収まっているのに対して、これら不明文字は方画線が無視して刻まれており、かつ枠の右寄りに書かれバランスが悪いのが目を引く。不明文字は時間をおいて天瓦に追刻されたと見ても問題はないだろう。さらに、「天」は左右対称の文字であるため判断が難しいが、瓦に打捺された状態を正字(打捺板の刻字は鏡文字)とすると座りがよい。とすれば、「天」と刻字方式が根本的に異なり、これも追刻である根拠になる。もともと区画が四つあるのに、文字は右上の天しかなく、空白に文字が書き加えられたのはある意味必然だったかもしれない。同様に大天瓦の「月」(表1)も追刻であろう。

2. 「大天」「天」文字瓦の集成と検討

(1) 「天」の諸説

大川清は「癸酉年高麗瓦匠造」瓦を前期、「大天・天」瓦を中期と見て[大川1962]、後者は、琉球人に手によって作られた瓦ととらえた。すなわち、「高麗瓦といわれるものは、高麗人(朝鮮人)のつくった瓦にちがいないが、琉球人にとっては、どうもあの瓦に記されている文字は気になってしかたがない。ひらたくいえば、民族的なプライドとでもいおうか、そんなものが心をゆさぶっていた。そこで、こんどは琉球人(琉球瓦匠)の手によって瓦がつくられることになった」(中略)「当時の人々は、自分達のつくり得る最大のものといったら城をのぞいてはほかになかった。人間のつくり得る最も大なるものという意味で「大」をえらんだ。「天」はかぎりなく高く、神秘的なもので、最高を意味し、ときには王者をもあらわす。「大天」は、王者の威信と王者の居城の比類なき広大さをたたえたものといえよう。それは琉球人の誇りでもあった」[大川1966, 209-214頁]と述べ、大天・天瓦を琉球人の手による創作とみた。

いっぽう近年では、仁王浩司が、沖縄に伝世する篆書体の「天」印を施す漆芸品15点・金工品7点の存在を挙げながら、天が王府御用の品にのみ施された印であり、首里王府を象徴するものと捉える。琉球王家が中国の天観念を導入し権力の正当化・隔絶化をはかったことを示す物質資料であり、伝世品の天印と高麗系瓦の「大天・天」は時期や書体は異なり、同一視はできないとしながらも、琉球社会における天の取り扱われ方において1つの傍証になると見る[仁王2023]。これも大川と同様に、天の文字を琉球主体として見ようとする考えである。

韓国に大天や天の文字瓦があることは山崎信二[山崎2000]、上原静[上原2001]が明らかにしている。筆者もかつて天や大天が打捺された瓦を韓国各地から出土していることをあげ、瓦に吉祥的な言葉である大天、天を刻むことができたのは次世代ではなく高麗瓦匠一世たちであると考えた[高2002]。

ところが、検索を続けていくと、思いがけず、高句麗や古代日本でもこれと同じ内容の文字瓦が

表2 「天」「大天」瓦の集成

	所在地	遺跡名	大天	天	瓦種	時期	出典	備考	
1	中国 吉林, 集安	丸都山城		○	不明	高句麗	吉林省 2004	棒書, 宮殿址出土	
2	韓国	京畿, 利川		○	平瓦	統一新羅/ 高麗	檀國大埋蔵 2001, 2002	複数種あり	
3		京畿, 安城		○	平瓦	高麗	京畿道 2002, 2005		
4		忠南, 公州	公山城		○	平瓦	高麗	公州大博物館 1987	
5		忠北, 鎮川	吉祥山망어골		○	平瓦	高麗?	檀國大博物館所蔵品	篋書
6		慶北, 慶州	岬山寺跡		○	丸瓦, 平瓦	高麗	松井ほか 1994	
7		慶北, 慶州	四天王寺跡	○	○	丸瓦, 平瓦	統一新羅/ 高麗	国立慶州 2013, 2014	2種あり
8		慶北, 慶州	天宮寺跡		○	丸瓦	高麗	国立慶州 2004	
9		慶北, 慶州	錫杖寺跡	○	○	丸瓦, 平瓦	高麗	東国大博物館 1994	2種あり
10		慶北, 慶州	昌林寺跡		○	丸瓦, 平瓦	高麗	朴洪國 1980, 鷄林 2022	
11		慶南, 昌原	遷善洞遺跡		○	平瓦	高麗	慶南 2014	
12		全北, 全州	東固山城		○	丸瓦	統一新羅	全北 2006	
13		全南, 莞島	将島清海鎮遺跡	○	○	平瓦	高麗	国立文化財 2001	複数種あり
14		済州, 済州	元堂寺跡	○		平瓦	高麗	済州大博物館 1988	済州牧官衙跡と同文
15		済州, 済州	済州牧官衙跡	○		平瓦	高麗	国立済州 2007	元堂寺跡と同文
16		日本	京都, 京都	○	○	軒平瓦	7C 中葉	前田 1999	篋書
17	大阪, 羽曳野		○	○	平瓦	7-8C	藤澤 2008, 狭川 2019	篋書	
18	宮城, 仙台		陸奥国分寺跡		○	不明	8-9C	原田 1974	指書
19	三重, 鈴鹿		伊勢国府跡		○	丸瓦, 平瓦	8C	新田 2004	刻印

存在することが分かった。もちろん、沖縄の大夫・天瓦とつながるものは高麗時代のものと考えられるが、広い地域で瓦にこれらの文字が確認できたことは留意したい。大天、天は、空に向かって展開する屋瓦にふさわしい文字である。また、地に対する天という意味だけでなく、高いもの、優れたものをあらわす漢字でもある。吉祥の言葉として、あるいは呪術（まじない）的なものとして共通する要素が存在する可能性があるだろう。

(2) 日本古代の「天」「大天」瓦 (表2・図9～10)

日本では4遺跡で大天あるいは天を記した瓦を確認している。

第一は京都市伏見区にある御香宮廃寺から出土した三重弧文軒平瓦で〔前田1999〕、平瓦部凸面に、1点は「大天」⁵⁾、他の1点に「天」の篋書きが確認できる(図9)。篋書きは瓦当面に近い位置に施されている。これに伴う軒丸瓦は山田寺式の単弁八弁蓮華文で、時期は7世紀中葉と考えられる〔堀2010〕。

御香宮廃寺は古代の山背国紀伊郡にあり、その地に造られた郡名寺院である紀伊寺の有力候補地である。紀伊寺は1499年に編纂された『山城州葛野郡楓野大堰郷廣隆寺來由記』に法号が隆城寺で、孝徳天皇のために秦河勝の弟である和賀が建立したことが書かれている。また『日本三代実録』貞観十七年二月九日条には875年に広隆寺別当として活躍した道昌が隆城寺別室でなくなったという記録があり、広隆寺と深い関係のある寺院と考えられる〔堀2010〕。

第二は大阪府羽曳野市にある善生寺廃寺から藤澤一夫が採集した文字瓦である〔藤澤 2008・狭川 2019〕。善生寺廃寺は善生寺跡、埴生廃寺とも呼ばれる寺院遺跡である。平瓦 (?)⁶⁾ 凸面にいくつかの意味不明な図とともに縦方向に「天大天」「牛一具 (?)」の文字が見える。ほかにも割れているのでよく分からないが、瓦の左下側にも「天」の一部とも見える篋書きがある (図 10-1)。

善生寺廃寺の創建瓦は単弁の西琳寺式 (少数) と善生寺式軒丸瓦で、創建が 7 世紀中葉に遡る寺院である〔上田 1987〕。『日本後紀』延暦十八年三月丁巳条には菅野朝臣真道が葛井・船・津氏を代表して、河内国丹比郡野中寺以南の寺山に墓地があるが、その地での木こりらの伐採禁止を求める記事がある。善生寺廃寺も墓域の一角にあたることから、善生寺廃寺もこの三氏に関わる寺院の一つであると考えられている。その中で葛井寺は葛井氏によることが確実であるため、善生寺廃寺は船氏あるいは津氏と結びつける説が有力である〔北野 1994〕。

第三は、宮城県仙台市の陸奥国分寺塔跡から内藤政恒が採集した天を記した瓦である〔原田 1974〕。瓦凹面に幅広く天と刻書されている (図 10-2)。陸奥国分寺は聖武天皇によって発願された国分寺の一つで、8 世紀中葉に創建された寺院である。その後 869 年の貞観地震で大きな被害を受け、ふたたび復興されるため、文字瓦の時期はおおよそ 8～9 世紀と考えられる。

第四は、三重県鈴鹿市所在の伊勢国府跡 (長者屋敷遺跡) から出土した天を記した刻印瓦である〔浅尾 1993〕。国府は古代に全国の 60 余りの国ごとに置かれた役所である。この遺跡は 8 世紀中頃に作られ、8 世紀末から 9 世紀初めには廃絶した。印は角印陽刻で、印の大きさは丸瓦が縦 3.2 cm、横 2.5 cm、平瓦が縦 3.8 cm、横 2.5 cm であるが、丸・平瓦共通した印と考えられている〔鈴鹿市 2014〕 (図 10-3)。この地域の伊勢国府や国分寺の 2 遺跡とその周辺の遺跡では多くの刻印瓦が出土し、「伊勢国府・国分寺系文字瓦」と総称されている〔新田 2004〕。

御香宮廃寺と善生寺廃寺の共通点を見ると、両者は畿内に位置し、7 世紀中葉の創建された寺院

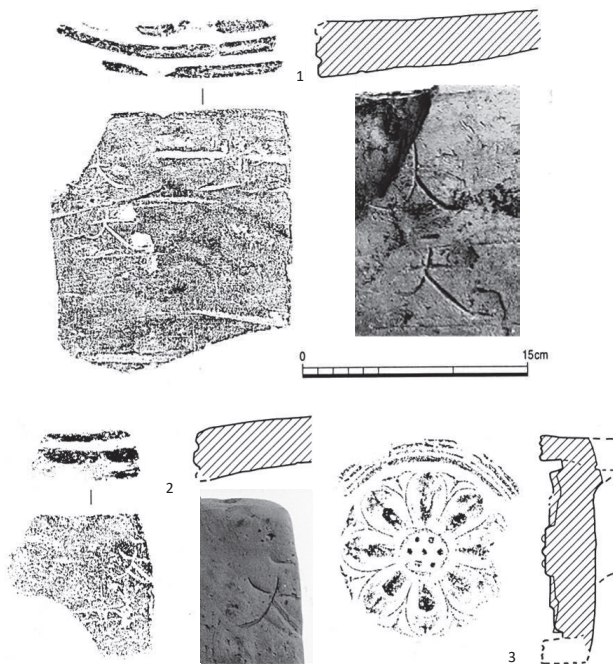


図 9 京都 御香宮廃寺の軒平瓦と軒丸瓦 (s: 1/5、写真は縮尺不同)

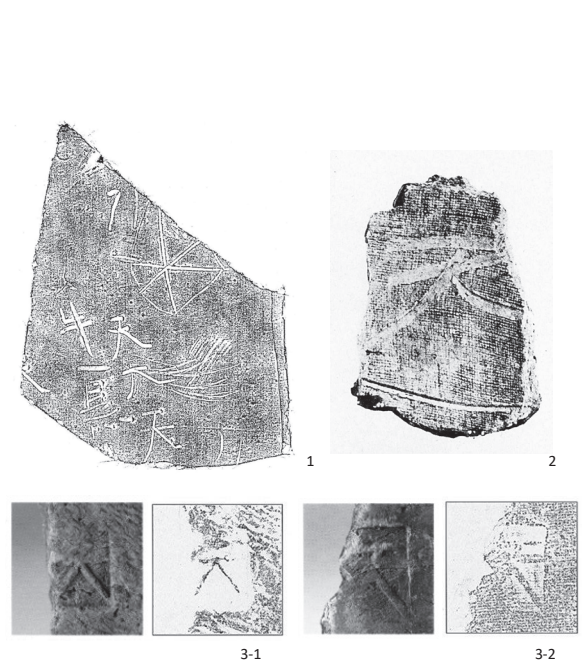


図 10 大阪 善生寺廃寺 (1)、宮城 陸奥国分寺 (2)、三重 伊勢国府跡 (3) の「天」瓦 (縮尺不同)

である。また、前者は秦氏、後者は船氏あるいは津氏といった渡来系氏族が創建した寺院であるという共通性がある。

陸奥国分寺跡は東国の国分寺と同様に多くの文字瓦が出土するのが特徴をもつ。その中には郡名を略して記したものが12郡分確認されている〔大川1973〕。文字の記入方法にはヘラ書き、指書き、刻印の3者があり、その内容は地名や人名などで、瓦生産に関わって書かれていることは間違いない〔高野2000〕。天については具体的な言及は見られない。

いっぽう、貞観地震で大きな被害を受けた陸奥国分寺・国分尼寺、多賀城・多賀城廃寺に復興のために、『日本三代実録』貞観十二年九月十五日条に造瓦に長けた新羅人の潤清・長焉・真平等を陸奥国修理府に配属し、瓦作りを指導させたという記事がある。基本的な造瓦技術は在地の伝統的なものでありながら、宝相華文軒丸瓦や棟平瓦など新羅的な要素が散見される〔佐川2014〕。9世紀後葉に新羅と接点がある。

伊勢国府跡でも多くの文字瓦が確認されるが、記入方式がほぼ刻印に限定されるのが特色である。これまで「小」「前」「人」「上」「羊」「大」「手」「川」「中」「宿」「水」「□□□□」「□□□」「首」「百」「守」「天」「乙」「申」「領」「三」「勾」「十」「工」と24種の文字が確認され、印形の異同に基づく型式数は69種ある〔新田・藤原2018〕。また、郡名などの地名との対比が難しく、人名の一部である可能性が考えられている〔新田2004〕。いずれにせよ、天は24種の文字群の中で捉えるべきであり、刻印という文字記入方式も異なるため、前三者とは性格が異なると見るべきだろうか。

(3) 高句麗の「天」瓦 (表2・図11)

高句麗の天瓦は中国吉林省集安市の丸都山城の「宮殿跡」と称する礎石建物群から出土した。宮殿跡から出土した何らかの篋書きを伴う瓦は、1159点に達し、鳥・人物などの絵画的なもの、記号状のもの、文字に大別できる。そのうち文字は86点あり、さらに天と報告されたものは3点ある〔吉林省2004〕。

これら3点のうち、1点は線が細く記号風のもので(図11-3)、確実に天と読めるのは2点である(図11-1・2)。いずれも格子叩きを施した平瓦あるいは丸瓦凸面に1cmほどの太さの棒状の工具で天と書かれている。文字瓦の色調は赤褐色系統でこの地に王都が置かれていた時期のものではない。千田剛道は、宮殿跡から出土した獣面文・蓮華文軒丸瓦などを高句麗瓦7期(6世紀後半～668年)に編年している〔千田2015〕。

(4) 新羅・高麗の「天」「大天」瓦 (表2・図12)

現在までに韓国で「天」または「大天」瓦の出土が確認できたのは、14遺跡ある(表2)。「天」が12遺跡、「大天」が5遺跡から出土している。この種の文字瓦は江原道を除き全道に広く分布し、慶州地域が5例とこの地域にやや集中する傾向がある。その分布の中心になる可能性がある。

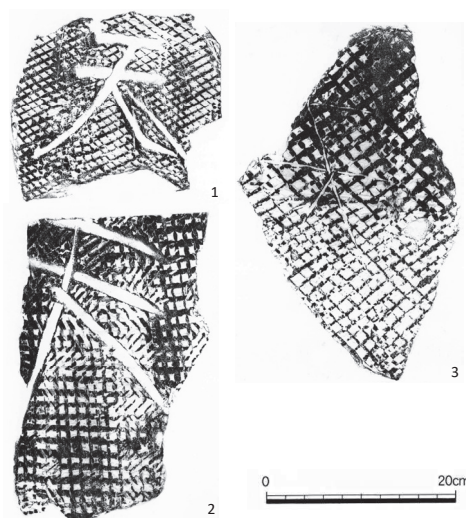


図11 高句麗丸都山城出土「天」瓦
(s: 1/8)

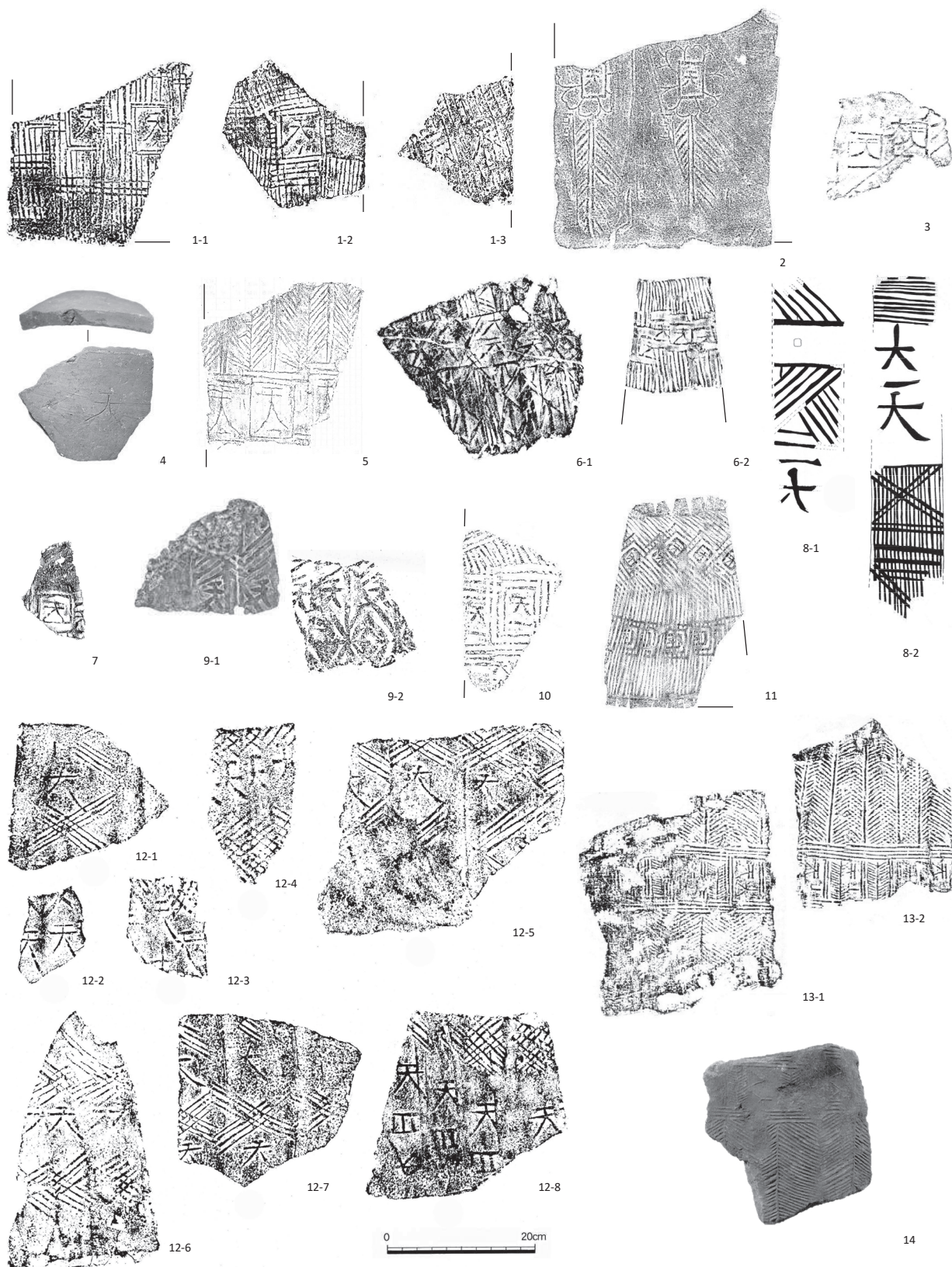


図12 韓国の「大天」「天」瓦 (s: 1/8、ただし3.4は縮尺不明)

- 1：利川 雪峰山城， 2：安城 奉業寺跡， 3：公州 公山城， 4：鎮川 吉祥山방어굴， 5：慶州 岬山寺跡，
- 6：慶州 四天王寺跡， 7：慶州 天官寺跡， 8：慶州 錫杖寺跡， 9：慶州 昌林寺跡， 10：昌原 遷善洞遺跡，
- 11：全州 東固山城， 12：莞島 将島淸海鎮遺跡， 13：濟州 元堂寺跡， 14：濟州 濟州牧官衙跡

あるいは慶州は寺院の調査が比較的よく行われており、少なからずその影響もあるかもしれない。篋書きは鎮川郡吉祥山パンオゴル(방어골)採集品(図12-4)⁷⁾の1例のみで、あとはすべて打捺による。

韓国の事例中、最も古いのは慶州四天王寺跡の「天」銘(図12-6-2)と考えられる。中板打捺板を使用しており、瓦厚も薄く8~9世紀代に遡ると見られる。表2の時期の項目は基本的に中板打捺は統一新羅、長板打捺は高麗時代とした⁸⁾。済州島の2遺跡(図12-13・14)のものは横書きという共通性がある。遺跡の位置も遠くなく同板製品であろう。また、莞島郡将島清海鎮遺跡では様々な天瓦が出土しているが、図12(8)は「大」が倒置していると見て「天四大」と読まれている(国立文化財2001)。

3. 長方形軒平瓦の検討

(1) 播磨産長方形軒平瓦

沖縄高麗系瓦の軒平瓦は、下縁が弧線を呈する一般形(図13-5・6)と下縁が直線になる(図13-7~12)二者に大別できる(以下、沖縄高麗系軒瓦の型式名は図13の番号を使用し、必要に応じて大川清の分類名を併記する)。後者を一般に長方形軒平瓦と呼び、韓国にも類例がなく、沖縄独自のものと考えられてきた。ところが、京都と兵庫県南部の播磨地域でこれに類似する瓦当の存在を確認した。京都から出土したものも播磨産である。沖縄と直接的な関係があるかどうかは不明であるが、形態的には極めて類似しており、この種の瓦を考える上で示唆するところがあると考え、紹介しておきたい。

これまで長方形瓦を確認したのは、兵庫県神戸市西区神出窯跡群と三木市平井窯跡の窯業遺跡の生産遺跡と、それが供給された平安京の1遺跡である(図14)。神出窯跡群と平井窯跡はほぼ南北に位置し、直線距離で7, 8 km 離れている。

まず、神出窯跡群(図14-2)では、老ノ口地区(2-3)、宮ノ裏支群(2-1)、堂ノ前支群(2-2)で1点ずつ出土しており⁹⁾、同範の可能性が高い。これらの地点は最大500 m 離れているが、他の瓦でも異なる支群で同範の瓦が出土している場合が多々あり、支群間で瓦範を共有していたことを示している[瀬瀬2018]。

平安京は左京六条三坊七町出土から2点出土しており(図14-1)、これも神出窯跡群と同範の可能性が高い。拓本から大きさを測る

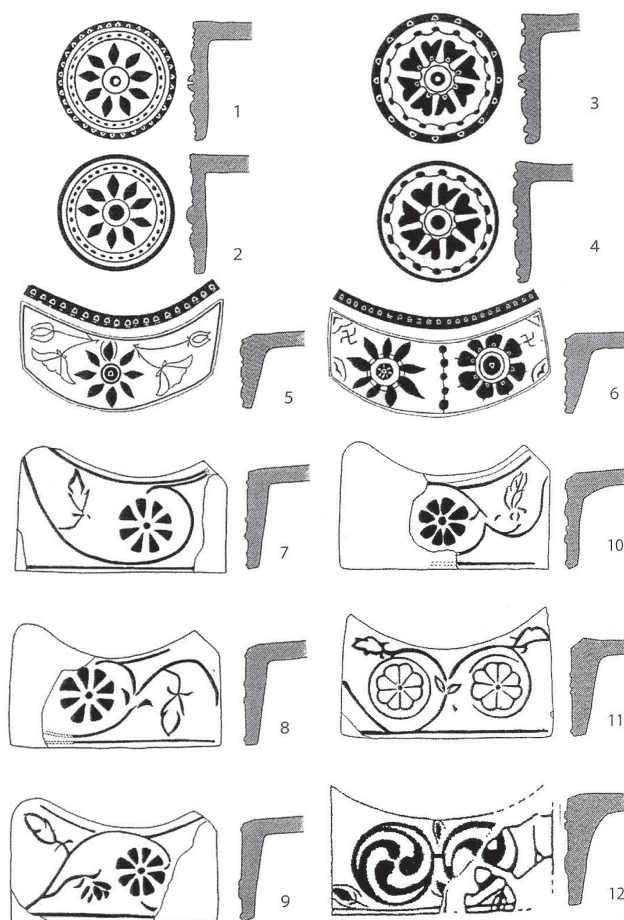


図13 沖縄高麗系瓦の軒丸瓦・軒平瓦(約1/10)

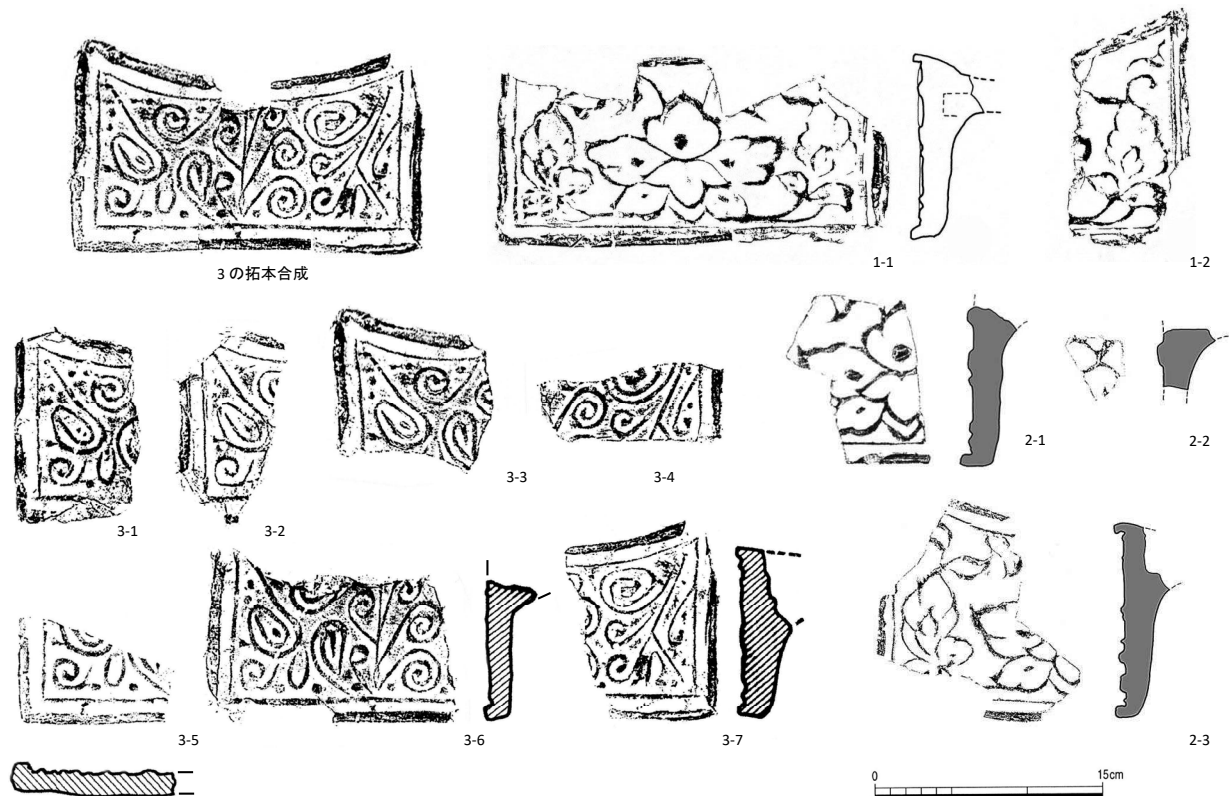


図14 播磨産長方形軒平瓦 (s: 1/5)

1: 京都 平安京左京六条三坊七町, 2: 兵庫 神出窯跡群, 3: 兵庫 平井窯跡

と、下縁長 25.6 cm、中央部での高さ 12.2 cm、右縁推定高 15.6 cm である。報告書では時期を 12 世紀末～13 世紀初とする [定森 1995]。

神出窯跡群報告書では文様を「宝相華文」とする。中央に大きく側視した花卉を置き、左右に蕾状の花卉を展開するもので、全体の構図は高麗系瓦の軒平瓦中の図 13 (5・7～10) と共通性がある。作り方は播磨で平安後期によく見られる別個に作った平瓦と瓦当を接合する「包み込み技法」による。神出窯跡群報告書では「瓦当面は正方形に近い形状を呈し、通常の軒平瓦とは異なるため、使用形態は不明だが道具瓦の一種」 [瀬瀬 2018, 160 頁] と捉えている。

三木市平井窯跡 (図 14-3) のものは、3 号窯灰原から出土したもので [中村 1990]、蕨手文を闊達自在に展開するもので、神出窯跡群や平安京例とは文様が全く異なる。大きさは、拓本から復元すると、下縁長約 23 cm、中央部での高さ約 12 cm と平安京例に比べてやや小さい。

(2) 長方形軒平瓦型式の整理

これまでの研究では、高麗系軒瓦 (図 13) は軒丸瓦 (1・2) と軒平瓦 (5)、軒丸瓦 (3・4) と軒平瓦 (6) がセットをなすことが確認されている。それに対して長方形軒平瓦に組みあう軒丸瓦については言及がない¹⁰⁾。また、下縁弧状軒平瓦の型式は 2 種であるのに対して長方形軒平瓦は 6 種と多い。組みあう軒丸瓦が明確でないにもかかわらず、種類が多いのは興味深い現象である。

今回、長方形軒平瓦を整理・検討して行く中で、範傷から図 13 (9) と (10) が同じ型式であることに気づいた。もともとこの型式は大川清によって破片ながら、図 15 (2-1) (大川 3 類 C)

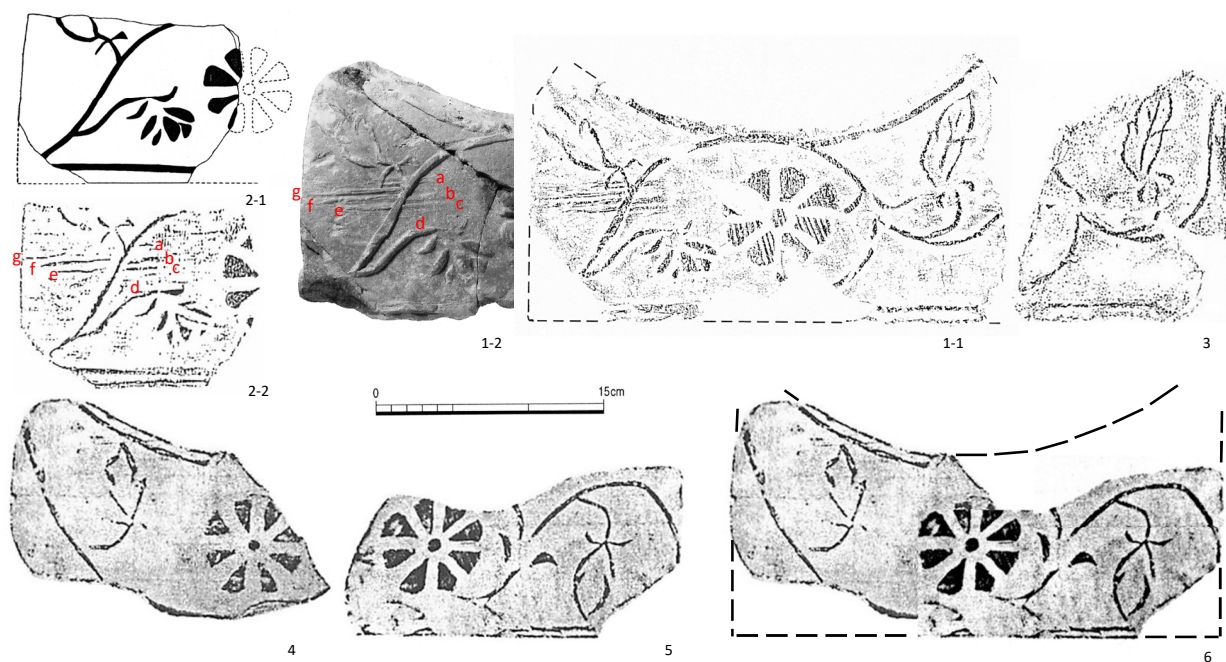


図 15 沖縄長方形軒平瓦 (s : 1/5)

として掲示されたもので、その後いくつかの断片的な資料が追加されて、図 13 (9) の形まで復元されてきた。ところが浦添ようどれから図 12 (10) (大川3類D) のほぼ完形の瓦が出土した(図 15-1-1・1-2)。これは (1-2) と (2-2) で示したように、主要な範傷 a～g が一致し、(9) と (10) は同型式であることが判明した。このような混乱が起こった理由は、「大川氏の素材とした瓦はすべてが所在不明という状況に近い」[山崎 2000, 385 頁] ため、良好な資料を実見できないという資料的制約にある。

いっぽう、山崎信二は図 13 (7・8) について「同範かもしれないという疑いをもたせる部分」[山崎 2000, 387 頁] があると見ている。確かに蓮華文各弁の形態や大きさは近似している。写真資料がないので、両者が同範であるかの判断は難しい。軒平瓦の大きさとして成り立つのかどうか検証するために、両者の拓本を合成したものが図 15 (6) である¹¹⁾。図 15 (7・8) とともに中心文様の蓮華文が中央になく左、右に偏っているのが特徴であるが、拓本を合成すると、蓮華文はほぼ中央に位置するようになり、下縁長がおおよそ 32.5 cm という数値を得た。

一方、図 15 (1) は右側がやや欠失しているが、報告書Ⅱでは下縁の復元長を 33.2 cm (中央部高 12.4 cm) としている。筆者もその右側の破片拓本(図 15-3) を (1) に合成して 33 cm 弱という数値を得ている。このように図 13 (7・8) は、瓦当の大きさとしては、同一型式とみても問題がないことが分かった。もちろん、この成否については、今後の新たな資料の発見を待たなければならないのは言うまでもない。しかしながら、このような想定が許されるのであれば、片寄って蓮華文が配置されていた形式がなくなり、あたかも下縁弧状軒平瓦(図 13-5・6) にそれぞれ対応するように、中央に蓮華文をおくものと、蓮華文または巴文を並列させるものが 2 種ずつとなり、きれいに整理されることになる。

なお、主文様を並列させる長方形軒平瓦は、図 13 (11) が下縁長約 27 cm (中央部高 11.7 cm)、同じく (12) が約 29 cm (中央部高 13.2 cm) で、中央に蓮華文をもつものはやや大型で、文様を二

つ並列するものはやや小型の規格となる。

(3) 長方形軒平瓦の文様と機能

沖縄長方形軒平瓦の起源について、山崎信二は軒平瓦の瓦当部を成形するのに平瓦を折り曲げる技法を用いるが、沖縄における形態の変化として、下縁部を弧状に切り取ることなく、そのままの状態で作られたため生まれたものと見る。すなわち、下縁弧線軒平瓦より長方形軒平瓦へ、強いて3期区分するなら、大川1・2類(図13-5・6)⇒3類(7~10)⇒4・5類(11・12)の変遷を考えた[山崎2000]。

いっぽう、関口広次は下縁弧線軒平瓦が長方形軒平瓦に比べ文様がやや退化するとし、逆向きの変化を想定している[関口1976]。しかし、文様論でいうなら、立体的でやや複雑な蓮華文(図13-5・6)⇒平面的で簡素な蓮華文(7~10)⇒線表現の蓮華文(11)とするのが退化のパターンであり、蓮華から展開する蕾状の花文もその順に簡素化しており、矛盾はない。文様系統の異なる巴文(12)はさておき、山崎説に軍配が上がる。

長方形瓦について神出窯跡群報告では道具瓦の一種と見る。ところが、首里城の調査報告書を見ていくと、城内で高麗系瓦の中では、破片ながらも、長方形瓦が相対的に多く出土[上原1995・1996, 金城1998, 仲座2010, 瀬戸2014, 新垣2016など]していることがわかり、沖縄の場合、量的には道具瓦というよりはやはり軒平瓦である蓋然性は高い。

では、なぜこのような異形の軒平瓦が生まれたのだろうか。関口はこれに対し、「文様は1個の軒平瓦で完結するものでなく、蔓が次の瓦に連続する如く描かれている」「長方形に近い形状を有することと、文様が連続して全体となる如く構成されていることは、軒先の装飾を極めて重視し、又工夫して設計された建築葺瓦技術である」[関口1976, 46頁]と軒瓦の装飾性から理解しようとした。

筆者はこれを瓦の機能面から一つの仮説を提起したい。沖縄は台風の通り道であり、暴風雨の影響が大きいという気候上の特色がある。漆喰で目地接ぎする瓦の固定法[大塚1984]はよく知られており、台風にも備えた独自の発展が見られる。また、沖縄では明系瓦から倒置した三角形の形態をとる滴水瓦が導入される。その機能には①装飾性、②垂木の保護、③雨水のまくれ防止にあるという[渡辺1995]。滴水瓦は瓦当面の中央下端が突出していること、瓦当面と平瓦との接合角度が約120度であることから、平瓦凹面に集めた雨水を真下におとす。一般的な軒平瓦に比べて屋根を受ける木製部材の保護に有効であると考えられる。

では、長方形軒平瓦はどうであろうか。長方形軒平瓦は平瓦との接合角度がほぼ直角であり、滴水瓦に比べると雨水のまくれ防止には劣る。しかしながら、その瓦当は中央部の高さが11.7~13.2cmあり、図16のように、軒方向に配列す

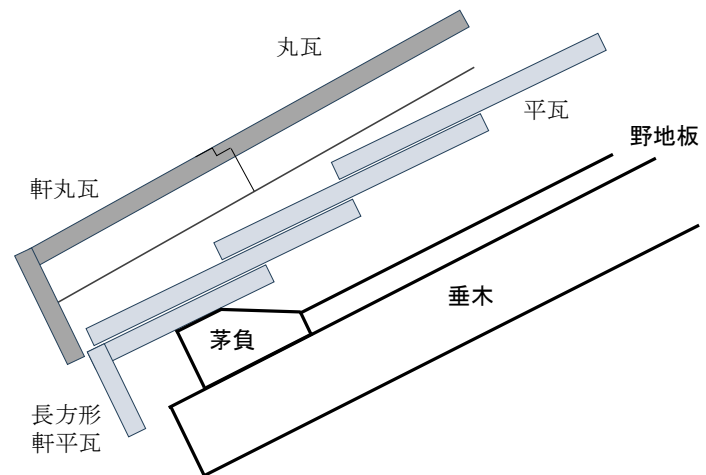


図16 長方形軒平瓦を使用した軒先の断面模式図

ることによって瓦を受ける茅負の前面を隙間なくカバーできるはずである。屋根瓦を直接支える茅負の劣化を抑えることで建築の寿命を延ばすことができると考えたのではないだろうか。

おわりに

本稿では、沖縄高麗系瓦について、①天の新型式にある不明文字、②大天・天瓦、③長方形軒平瓦という3点の検討を行った。以下、今回論じた要点をまとめておく。

天の不明文字と重なる新型式は打捺文の復元を行ない、主に韓国の文字瓦との比較を通して不明文字は干支+年+瓦と判読した。干支は己巳がもっとも可能性が高いと考えられる。これが確定できれば、癸酉年とともに高麗系瓦に二つの年代基準ができることとなる。より良好な資料の発見とさらなる検討を期待したい。

天・大天瓦を集成した。韓国（新羅・高麗時代）では14遺跡、ほぼ全道から出土していることを確認した。また、高句麗で天、日本で天や大天の文字瓦を見だし、少数ながら、韓国に限定されるものでないことが分かった。沖縄高麗系瓦は直接的には、韓国高麗時代の文字瓦の影響のもと成立したと判断されるが、瓦に対する「大天・天」の意味についてはより広い視座を持つ必要がある。

長方形軒平瓦は、沖縄独自のものと考えられてきたが、中世初期に播磨産の同様な瓦当形が存在することを指摘した。また、長方形軒平瓦型式が整理できる可能性を示し、その特異な形態は軒先の茅負の保護に有効ではないかと推測した。

最後に癸酉年に関連して、山口市乗福寺から出土した滴水瓦について附言しておきたい。周知のように癸酉年についてはいまだ諸説がある。筆者の旧稿〔高2002〕では、韓国の羽状文（魚骨文）の消滅などからは1393年説を否定することにはならないことを述べた。

ところが、大内氏の菩提寺の一つである乗福寺から桶巻作り平瓦、龍文軒平瓦（滴水瓦）、鳳凰文軒丸瓦、鷲頭・龍頭・雑像といった特殊な棟装飾瓦がセットをなす高麗末・朝鮮様式の瓦が出土した〔佐藤2001・2003・2004〕。これらの時期は、瓦当の文様や作り方などから14世紀後葉、大内義弘の治世であることがほぼ確実である〔高2006〕。義弘は高麗・朝鮮と積極的に外交を進め、1379年には高麗の求めに応じて倭寇対策として高麗に派兵し、その後、『朝鮮王朝実録』には1395年から義弘が亡くなる1399年まで毎年朝鮮国への遣使の様子が記録されている。その中で大内氏は始祖を百済の琳聖太子と主張して、朝鮮側に田地の割



図17 山口市乗福寺出土瓦

譲や史料を求めているのは注目される場所である [須田 2002]。このような瓦を葺いた建物の登場は、大内が百済につながることをあらわすための一つの舞台装置であり、大内版「瓦博士」の渡来とも理解できる。

一方、沖縄でも同じ頃、1389年の琉球刻中山王察度が高麗に遣使し、表文を奉じ、倭寇の虜掠人を帰国させ、方物を献じ正式な国交が始まる。その後、王朝が交替し朝鮮になっても頻繁な遣使が行われている [河宇鳳 1994]。癸酉年が1393年であれば、それは国家間の技術者の派遣であり¹²⁾、当然ながら乗福寺のような滴水瓦や特徴的な棟装飾瓦が入ってくるはずである。したがって、間接的な根拠ではあるが、現在では1393年説は成立しがたいと考えている。

附 記

本稿は2023年9月15日の沖縄考古学会9月定例会で発表した内容を大幅に改訂したものである。資料調査においては仁王浩司氏をはじめ、浦添市歴史にふれる館の皆様からご支援をいただいた。また、稿をなすにあたり多くの方々より有益なご助言やご援助をいただいている。ご芳名を記して感謝の意を表したい。

徐始男、呉虎錫、柳煥星、韓盛旭、池田榮史、石井龍太、上原静、上村和直、植山茂、大脇潔、
亀島慎吾、下地安広、高島和子、館内魁生、主税英徳、村野政景、宮里信勇 (敬称略)

註

- 1) 大川清は沖縄の瓦を「高麗系古瓦」「大和系古瓦」「明国系瓦」と呼んで3系統に分けた [大川 1962]。その後は、「高麗系瓦」「大和系瓦」「明朝系瓦」と呼ばれることが一般的になっている。これに対して、山崎信二は「大和系瓦」の大和が奈良と誤解されること、これが九州の影響を受けていることから「九州系瓦」 [山崎 2000] の呼称を提唱した。また、「明国系瓦」は石井龍太によって明から技術を移入したと言う根拠が明確でない点、瑠璃瓦を含めた明の瓦との構成要素に違いがあることから、「琉球近世瓦」 [石井 2006] の名称が提起されている。ともに、傾聴すべき点が多いが、前者は沖縄において大和は伝統的に日本をさす用語であり、九州系に名称を変更してしまうと、逆に九州に偏ってしまう恐れがある。後者は琉球近世瓦に対応するのは琉球中世瓦であり、高麗系、大和系と並列する名称としては違和感がある。また、高麗系には高麗にはない瓦当折曲げ技法、大和系にも羽状文叩きがあるように、それぞれの系統の瓦には様々な要素が入っており、明系=明の瓦である必要はない。従来の用語は、韓国、日本、中国という沖縄を取りまく国々より影響を受けた瓦の系統を考える上で分かりやすい用語である。ただ、明朝系瓦のみ朝が付いているのは収まりが悪く、本稿では「明系瓦」とする。
- 2) この文様については、現在韓国では主に魚骨文とよばれ、一部樹枝文という名称も使われている。ここでは大川清以来の沖縄で一般的に使用される呼称である羽状文を使う。
- 3) 瓦桶の前に立つ瓦匠から見ると、時計回りに回転する瓦桶に巻かれた瓦筒に対して、同じ位置で打捺した際に生じる事様である。
- 4) 図8 (8) ~ (16) の文字瓦の銘文について記す。(8) は枠外に「發令」、枠内に「戊五年瓦草作伯士必山毛」、(9) 「重興寺造瓦草」、(10) 「□□元年己巳北舍瓦草」、(11) 「沙羅瓦草」、(12) 「麻山停?子瓦草」(13) 「太平興國五年庚申六月 / 弥勒藪龍泉房瓦草」、(14) 「陵城郡公瓦草 · ·」、(15) 「陵城郡公瓦草オ八隊」、(16) 「甲戌九月十一日瓦作□」。
- 5) 前田 1999 では文字を「天」を記すとのみ記述し、堀 2010 では2字あるものは「天天」と解する。1字目は上の左側が欠失しているものの、天ならば、1画目の横画が見えてもよい部分は残っており、1字目は「大」と判断してよい。
- 6) 藤澤 2008 掲載の拓本横にはスケール 1/3 とあり、拓本から計測では、縦長 22.4 cm、横長 17.6 cm ほどの大きさになるため平瓦と判断される。
- 7) 檀國大学校石宙善紀念博物館所蔵。忠清北道鎮川郡鎮川邑の吉祥山 (今の胎靈山) パンオゴル (망어골) での採集品である。灰色硬質、厚さ 1.7 cm、横 14.2×縦 12.1 cm 残存する平瓦である。凸面の叩き文様がきれいに

消されており、その端面側近くに篋書きで「天」（字径 4.5 cm）と記す。写真は檀國大学校石宙善紀念博物館 吳虎錫氏のご厚意による。

- 8) 天・大天瓦の年代については白頭文化研究院の柳煥星氏より多くの教示を受けた。中板は瓦桶の縦方向に 2～3 度で打捺できる長さのもの、長板は瓦桶の縦方向に 1 度で打捺できる長さの打捺板をあらわす [崔英姫 2009]。
- 9) 嶺南 2018 報告書では、窯跡が発見された調査地点を「支群」、窯跡が発見されていない場合は「地区」と呼び分けている。それぞれの出土地点は、老ノ口地区は 29 トレンチ暗灰色土、宮ノ裏支群は IV-D 灰褐色粘質土出土、堂ノ前支群は調査記録に「2 号窯？」とあるがどの窯を指すか判断できないとする。
- 10) 浦添ようどれ二番庭下層の瓦溜り遺構からは、軒丸瓦 2 が 2 点、軒丸瓦 3 が 1 点、長方形軒平瓦 10・11・12 が各 1 点ずつ出土している [宮里・木下 2005]。いずれも瓦当の 60% 以上を残す個体である。ここで注目されるのは下縁弧状軒平瓦が見られない点である。これだけでは何とも言えないが、軒丸瓦との組合せをもう少しフレキシブルに考えてもよいのではという予感を感じさせるものである。
- 11) 図 15 (4・5) の拓本 [大川 1962, 別表] には縮尺表示はないが、小渡 1986, 189 頁に (4) と同じ個体の拓本があり、これらを参照して縮尺を調整した。
- 12) 全羅南北道や慶尙南北道を中心とする韓半島南部地域の滴水瓦への転換は、他の地域より遅れて朝鮮時代から考えられる [高 1999]。そのため、この地域からの瓦技術の伝播であれば、1393 年説も成り立つ。しかしながら、国家間の交渉のなかでの瓦作りの伝播であれば、乗福寺例のように最新の造瓦（建築）技術の伝播を想定すべきであろう。

参考文献

(日本文)

- 新垣力編 2016 『首里城跡—正殿地区発掘調査報告書—』 沖縄県立埋蔵文化財センター。
- 池田榮史 2011 「沖縄における高麗瓦研究と今後の展望」『13 세기 동아시아 세계와 진도삼별초』 木浦大學校博物館。
- 石井龍太 2006 「琉球近世瓦瓦当紋様集成と型式学的分類—琉球近世瓦の研究その 2—」『東京大学考古学研究室研究紀要』 20。
- 石井龍太 2014 「琉球諸島出土「高麗系瓦」の製作技法と年代, グスク瓦の基礎的研究」『沖縄文化研究』 40, 法政大学沖縄文化研究所。
- 上田陸 1987 『藤井寺市及びその周辺の古代寺院 (下)』 藤井寺市教育委員会。
- 上原静編 1995 『首里城跡—南殿・北殿跡の遺構調査報告』 沖縄県教育委員会。
- 上原静 1996 「首里城跡の高麗系瓦と大和系瓦—西のアザナ地区の資料—」『沖縄教育庁文化課紀要』 12。
- 上原静 2001 「沖縄諸島の高麗瓦について」『比較文化研究』 7-1, 서울大学校比較文化研究所。
- 上原静 2013 『琉球古瓦の研究』 榕樹書林。
- 大川清 1962 「琉球古瓦調査抄報」『文化財要覧』 1962 年版, 琉球政府文化財保護委員会。
- 大川清 1966 「付 琉球の古瓦」『かわらの美—埋れた日本古代史』 社会思想社。
- 大川清 1973 「東国国分寺造営時における造瓦組織の研究—瓦磚文字を中心として—」『国史館大学人文学会紀要』 5。
- 大塚清吾 1984 『写真集 沖縄の屋根獅子』 葦書房。
- 金城亀信編 1998 『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書 (I) —』 沖縄県教育委員会。
- 韓盛旭 2025 「沖縄出土高麗青瓷と「癸酉年高麗瓦匠造」銘瓦の検討」『学究無限 吉岡康暢先生卒寿記念論文集』 同刊行会。
- 北野耕平 1994 「善生寺跡」『羽曳野市史 3 史料編 1』 羽曳野市。
- 金昌鎬 2019 「韓国羅末麗初の瓦銘文」『東アジア瓦研究』 6, 東アジア瓦研究会。
- 高正龍 1999 「韓国における滴水瓦の出現時期—黄州・成仏寺瓦の紹介をかねて—」『朝鮮古代研究』 1。
- 高正龍 2002 「沖縄出土「癸酉年高麗瓦匠造」銘瓦の製作年代—魚骨文の消滅時期に関連して—」『田辺昭三先生古稀記念論文集』。
- 高正龍 2006 「山口乗福寺跡出土瓦の検討—韓国龍文端平瓦の編年と麗末鮮初の滴水瓦の様相—」『喜谷美宣先生古稀記念論文集』。
- 高正龍 2007 「百濟刻印瓦覚書」『朝鮮古代研究』 8, 朝鮮古代研究刊行会。
- 高正龍・熊谷舞子・安原葵 2014 「関西大学博物館所蔵朝鮮瓦—文字瓦を中心として—」『関西大学博物館紀要』 20。
- 崔英姫 2009 「新羅における平瓦・丸瓦製作技術の展開—慶州地域を中心として—」『東アジア瓦研究』 1, 東アジア瓦研究会。
- 狭川真一編 2019 『瓦仙人の世界—考古学者 藤澤一夫コレクションから—』 元興寺文化財研究所。
- 佐川正敏 2014 「貞観地震復旧瓦生産における新羅人の関与について」『宮城考古学』 16, 宮城県考古学会。

- 瀨額文佳編 2018『神出窯跡群発掘調査報告書』神戸市教育委員会文化財課。
 定森秀夫編 1995『平安京左京六条三坊七町 京都市下京区大田原町・東鋸屋町』京都府京都文化博物館。
 佐藤力編 2001『乗福寺跡・御堀遺跡』山口市教育委員会。
 佐藤力編 2003『乗福寺跡Ⅱ』山口市教育委員会。
 佐藤力編 2004『乗福寺跡Ⅲ』山口市教育委員会。
 下地安広編 1985『浦添城跡発掘調査報告書』浦添市教育委員会。
 下地安広 1986「高麗系古瓦の製作技法考察（1）—浦添城跡出土の瓦を中心として—」『南島考古』10, 沖縄考古学会。
 下地安広 1990「高麗系古瓦について」『考古学ジャーナル』320, ニュー・サイエンス社。
 鈴鹿市考古博物館 2014『史跡 伊勢国府跡』。
 須田牧子 2002「室町期における大内氏の対朝関係と先祖観の形成」『歴史学研究』761, 青木書店。
 関口広次 1976「沖縄に於ける造瓦技術の変遷とその間の事情—勝連城本丸跡出土古瓦を中心として—」『考古学雑誌』62-3, 日本考古学会。
 瀬戸哲也編 2014『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書（Ⅴ）—』沖縄県立埋蔵文化財センター。
 高野芳宏 2000「多賀城・陸奥国分寺の文字瓦」『文字瓦と考古学』国士舘大学実行委員会。
 千田剛道 2015『高句麗都城の考古学的研究』北九州中国書店。
 仲座久宜編 2010『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）—』沖縄県立埋蔵文化財センター。
 中村浩編 1990『久留美毛谷—古窯跡群等の発掘調査報告書—』毛谷古窯跡群埋蔵文化財調査会。
 仁王浩司 2023「[「大天」「天」銘の意味（上）～高麗系瓦にみる 浦添グスク有力者の支配イデオロギーと太陽子思想への道～]」『南島考古』42, 沖縄考古学会。
 西谷正 1981「高麗・朝鮮王朝と琉球の交流—その考古学的研究序説—」『九州文化史研究所紀要』26, 九州大学九州文化史研究施設。
 小渡清孝 1986「浦添の古瓦」『浦添市史第6巻資料編5 自然・考古・産業・歌謡』浦添市教育委員会。
 新田剛編 2004『企画展 文字瓦を考える』鈴鹿市考古博物館。
 浅尾悟編 1993『伊勢国分寺（5次）・長者屋敷遺跡（1次）発掘調査概要報告』鈴鹿市教育委員会。
 長尾充 2002「建築部材」『山田寺発掘調査報告 本文編』奈良文化財研究所。
 新田剛・藤原秀樹編 2018「文字瓦の型式分類」『史跡伊勢国分寺跡—遺物編—』鈴鹿市文化スポーツ部文化財課発掘調査グループ。
 野村孝文 1976『増補 南西諸島の民家』相模書房。
 原田良雄編 1974『東北古瓦図録』雄山閣出版。
 藤澤典彦 2008「[「拾う」からの出発—藤澤一夫の若き時空間—]」『博物館だより』102, 大阪大谷大学博物館。
 堀大輔編 2010『飛鳥白鳳の薨～京都市の古代寺院～』京都市文化財ボックス24, 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課。
 前田義明 1999「伏見城跡・御香宮廢寺」『平成9年度京都市埋蔵文化財概要』京都市埋蔵文化財研究所。
 松井忠春・上村和直・植山茂・高正龍・定森秀夫・菱田哲郎・藤原学・朴洪國・吉井秀夫 1994「韓国慶州地域寺院所用瓦の研究—岬山寺所用瓦の考察」『青丘學術論集』4, 韓国文化研究振興財団。
 三島格 1980「琉球の高麗瓦など」『鏡山猛先生古希記念古文化論叢』。
 宮里信勇・木下秋海編 2005『浦添ようどれⅡ 瓦溜り遺構編—史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査報告—』浦添市教育委員会。
 宮里信勇・木下秋海編 2007『浦添ようどれⅢ 金属工房跡編—史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査報告—』浦添市教育委員会。
 山崎信二 2000「沖縄における瓦生産」『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所。
 渡辺誠 1995「日本・琉球への近世初期の滴水瓦の伝播」『王朝の考古学 大川清博士古稀記念論文集』雄山閣出版。
 （韓国・中国文）
 京畿道博物館 2002『奉業寺』。
 京畿道博物館 2005『高麗 王室寺刹 奉業寺』。
 鷄林文化財研究院 2022『慶州 昌林寺址Ⅰ 慶州 南山 一圓内 昌林寺址 1次 発掘調査』。
 公州師範大学博物館 1987『公山城 百濟推定王宮址 発掘調査報告書』。
 公州大学校博物館 1996『千房遺蹟』。
 国立加耶文化財研究所 2011『昌寧 述亭里寺址東・西三層石塔 周辺地域 発掘調査報告書』。
 国立慶州文化財研究所 2004『慶州天官寺址 発掘調査報告書』。

- 国立慶州文化財研究所 2013 『四天王寺Ⅱ 回廊内廓発掘調査報告書』。
 国立慶州文化財研究所 2014 『四天王寺Ⅲ 回廊外廓発掘調査報告書』。
 国立国語研究院 1992 『東洋三国の略体字比較研究』。
 国立文化財研究所 2001 『将島清海鎮遺蹟 発掘調査報告書Ⅰ』。
 国立扶餘文化財研究所 1994 『獅子菴遺蹟 発掘調査報告書』。
 国立扶餘文化財研究所 1996 『彌勒寺遺蹟 発掘調査報告書Ⅱ 図版編』。
 国立益山博物館編 2020 『国立益山博物館』。
 国立濟州博物館 2007 『耽羅와 琉球王国』。
 慶南發展研究院歴史文化센 2014 『昌原 천선일반 産業団地造成敷地内 遷善洞遺蹟』。
 檀国大学校埋蔵文化財研究所 2001 『利川 雪峰山城 2次 発掘調査 報告書』。
 檀国大学校埋蔵文化財研究所 2002 『利川 雪峰山城 3次 発掘調査 報告書』。
 東国大学校慶州갯포스博物館 1994 『錫杖寺址』。
 民族文化遺産研究院 2017 『月南寺址Ⅱ 2次 発掘調査報告書』。
 朴洪國 1980 『慶州地方의 出土된 文字銘瓦』『全国大学生学術研究発表論文集（人文分野）』5, 高麗大学校学徒護
 国団。
 沈光注 2013 「新羅 城郭 出土 文字기와—南漢山城 出土 문자기와를 中心으로—」『城郭과 기와』韓国기와学会・韓
 国城郭学会。
 濟州大学校博物館 1988 『水精寺・元堂寺地表調査報告』。
 李南珪・都英娥・金情暻・鄭銀美 2015 『高麗時代歷年代資料集』学研文化社。
 全北文化財研究院 2006 『全州 東固山城』。
 全南文化財研究院 2015 『新安 黒山島 官舎Ⅰ』。
 全南文化財研究院 2016 『新安 黒山島 官舎Ⅱ』。
 全南文化財研究院 2017 『新安 黒山島 无心寺址Ⅰ』。
 車順喆 2002 「「官」字銘 銘文瓦의 使用處 檢討」『慶州文化研究』5, 慶州大学校慶州文化財研究所。
 忠清南道歴史文化研究院 2009 『扶餘 無量寺 旧址Ⅱ』。
 河宇鳳 1994 「朝鮮前期의 对琉球關係」『国史館論業』59, 国史編纂委員会。
 邢澗 1903 『金石文字辨異』12。
 吉林省文物考古研究所・集安市博物館編 2004 『丸都山城—2001～2003年集安丸都山城調査試掘報告—』文物出版
 社。

図版出典

- 表 1 宮里・木下 2005, 表-5 (縦書きに変更)。
 表 2 筆者作成。
 図 1 A・C: 宮里・木下 2005, 54 頁第 31 図、B: 宮里・木下 2007, 39 頁第 20 図。
 図 2 宮里・木下 2005, 28 頁第 28 図。
 図 3 左: 国立扶餘 1996, 603 頁拓本 15、右: 筆者作成。
 図 4 筆者作成。
 図 5 1: 国立国語 1992, 86 頁、2: 国立扶餘 1996, 601 頁拓本 13、3: 高ほか 2014, 46 頁図 5。
 図 6 筆者作成。
 図 7 李南珪ほか 2015 から干支の部分を持ち抜き作成 (一部左右反転)
 甲子: 243 頁, 甲寅: 542 頁, 乙未: 409 頁, 乙酉: 294 頁, 丙寅: 628 頁, 丙子: 305 頁, 丁卯: 93 頁, 丁
 亥: 479 頁, 戊申: 441 頁, 戊戌: 210 頁, 己丑: 417 頁, 己巳: 89 頁, 庚午: 443 頁, 庚申: 117 頁, 辛
 卯: 173 頁, 辛未: 290 頁, 壬辰: 459 頁, 壬午: 68 頁, 癸丑: 534 頁, 癸巳: 224 頁。
 図 8 1: 邢澗 1903、2: 高 2007, 65 頁図 2、3: 李南珪ほか 2015, 296 頁、4: 国立扶餘 1996, 596 頁拓本 8、5: 全
 南文化財 2016, 103 頁図面 27、6: 筆者作成、7: 大川 1962, 397 頁第 7 図、8～12: 金昌鎬 2019, 4～6 頁図
 2～4、13: 国立扶餘 1996, 601 頁拓本 13、14: 全南文化財 2015, 52 頁図面 15、15: 全南文化財 2016, 99 頁
 図面 26、16: 京畿道 2002, 193 頁図面 57・194 頁図面 58。
 図 9 吉林省文物ほか 2004, 137 頁図 88・138 頁図 89。
 図 10 前田 1999, 190 頁図 176・図版 65。
 図 11 1: 藤澤 2008, 3 頁、2: 原田 1974, 213 頁、3: 新田 2004, 18 頁。
 図 12 表 2 参照。

図 13 上原 2013, 61 頁第 1 図.

図 14 1: 定森 1995, 130 頁第 110 図、2-1: 瀨瀬 2018, 38 頁図 32、2-2: 瀨瀬 2018, 86 頁図 78、2-3: 瀨瀬 2018, 159 頁図 140、3: 中村 1990, 参考図版第 21、3 の拓本合成: 筆者作成.

図 15 1-1・2: 宮里・木下 2005, 38 頁第 15 図・131 頁図版 14、2-1: 大川 1962, 108 頁第 5 図, 4・5: 大川 1962, 別表、2-2・3: 山崎 2000, 388 頁第 143 図.

図 16 筆者作成.

図 17 佐藤 2004, 巻頭図版 1.

(本学名誉教授)

오키나와 고려계기와 연구
 —새로운 문자기와 형식의 타날문 복원과 판독을 중심으로—

고정룡

본고에서는 오키나와 고려계 기와에 대해, 먼저 ‘天’자와 중복되는 불명 문자가 있는 새로운 형식에 대해 타날문 복원과 불명 문자 판독을 수행하였다. 그 결과, 글자는 주로 고려 시대의 문자기와와의 비교를 통해 ‘간지+年+瓦’로 판독되었다. 간지는 ‘기사(己巳)’일 가능성이 가장 높으나, 아직 불확정적인 요소가 남아 있다. 이 문자는 ‘天’기와에 추각된 것이다.

다음으로, 이와 관련하여 ‘天·大天’ 명문 기와를 집성하였다. 이들은 한국(통일신라, 고려) 14개 유적, 일본(고대) 4개 유적, 중국(고구려) 1개 유적에서 확인되어, 한국 뿐 아니라 다른 지역에도 분포하고 있음을 알 수 있었다.

끝으로, 오키나와 고유의 것으로 여겨져 온 장방형 암막새에 대해 검토하였다. 중세 초기 하리마(播磨)산 기와 가운데 유사한 형태를 가진 장식기와가 존재함을 소개하였다. 장방형 암막새는 6개 형식으로 수량이 많은 것이 특징인데, 그중 한 쌍은 범상(範傷)을 통해 동일 형식임을 확인하였다. 또, 중앙에 연화문이 없는 다른 한 쌍에 대해서는 실물을 확인할 수 없었으나, 탁본의 합성을 통해 동일 형식일 가능성을 제시하였다. 아울러, 특이한 장방형 암막새의 기능에 대해서는 연합을 보호하기 위한 것이었을 것으로 추정하였다.